巻頭言

マンガ研究センター長　竹宮惠子

2019 年は、私自身がほとんど一年を通じて、親しく京都国際マンガミュージアム（以下MM）のお世話になることとなった。何故かというと、私・竹宮の画業 50 周年展「カレイドスコープ」が、巡回の最後をここ MM で飾らせていただくという運びになったからである。4 ヶ月あまりに及ぶ長期の展を許可いただき、スタッフの行き届いたフォローや丁寧な応対を、折に触れて見ることが出来た。漫画家として 50 年画業を続けてきた集大成の展であったが、漫画家個人が自分の手の内で個展を行なうことは、カートゥーン作家以外では少なく、あっても出版社の主導で行なわれることが殆どである。人気漫画家であればあるほど、本人はあまり展示に意見を挟まず、出版社が展を構成することが多い。マンガの展示自体に対し、バックヤード込みで興味を持つ漫画家はさらに少ない。私はその中で、大学に教員として勤める間ずっと個展を行なうことで自分の研究を全うしてきた。その集大成としての「カレイドスコープ」展で、MM のスタッフ・研究員と密に連絡しあい、充分に意志を疎通させて、互いの精いっぱいを投入した展を作り上げることが出来たと考えている。

この館を知りつくした研究員が可能・不可能を図りつつ、私と私の片腕であるマネジャーの様々な希望を如何にかなえるかについては、まるで大きな迷路を設計するのに似ていて、見えていないその迷路を、大きさや壁面の色を想像しながら構築していくのは、これまで街のギャラリーで行なってきた個人のものとは大きく違う楽しみがあった。その楽しみとは、多くのスタッフと関わりながら、大きな展示（個人的なものでなく不特定多数に向けた公共的なもの）を創る、いわゆるキュレーターの楽しみだったのかもしれない。画業 50 周年を記念する展示が、そのような広さを持ったものになったのは、ひとえにスタッフや研究員が一丸となって成功に導いてくれた所以である。ここにささやかながら、その謝辞を述べたい。

さて、上記の件だけではなく、本年は MM にとって大きなことがおきた年でもある。それは大英博物館（しかもメインギャラリー）で「MANGA 展」が催されたことと、ICOM（International Council of Museums；国際博物館会議）が、京都で世界大会を催したことである。

まず、大英博物館の「MANGA 展」について述べる。この展は計画の初期段階から大英のキュレーターより当館への取材があり、当館からも様々の協力が為された結果、3ヶ月で18万人もの動員数を達成する展となった。このことは MANGA が既に世界のものとなっていることを証明したと言えよう。また、この展は日本のマンガファンでも楽しめ、その他あらゆる国々から訪れたファンにとっても乖離のない展になっていたことを言い添えたい。その大きな要因は「理解したつもり」の展でなく、本当によく理解された展が創り上げられたということに尽きる。キュレーション、という言葉がまだ日常ではない日本では、「展の構築」が実感を伴って考えられることも多くはないのが現実だが、大英における成功は「マンガの展示」を大きなポテンシャルを持ったレベルへと引き上げた。これまでの美術品とは違う展示、マンガの素晴らしさを最大限に魅せる展示を求めて、ここからは大きな飛躍が期待出来る。それに従事するキュレーターやスタッフにも、相応の自覚や希望が生まれて欲しい。当然のことだが、日本は日本のコンテンツをただ使うだけでなく、アーカイヴし、守っていくことや価値を高めていくことに、もっと力を注ぐべきであろう。

次に ICOM の世界大会が京都で催され、それも大英の展の終了直後、世界中のキュレーターが京都大会に集まってきたことについて。インバウンドの効果ばかりでなく、マンガによる日本学習（？）が進むことにより、日本という場所で育つ文化への関心は、既に「根を求める」ものになってきている。それはこの大会におけるシンポジウムでキュレーターたちが語った言葉にも表わ

れているだろう。博物館の意味を問い直し、かつ新たな地平をはっきりと認識して、そのために自覚的に行動すること。ICOMが京都で開催される前と後では、その感覚がまったく違うように感じるのは私だけだろうか。京都で大会が開催され、日本を含むアジア圏の博物館が世界の中で意識される。そして、その中の重要なポイントにこの MM が存在する。そんなことをこれまでは自分の心の中だけの自負として考えていたのだが、ICOM の後に再び思うと、もうそれは現実のことになっていた。今後、日本においてもすべての博物館員が、ヨーロッパの博物館員と同じレベルで、文化のために自覚的に働くということが誇りを持って自然に出来るよう、環境も含めて前進していくことを祈りたい。

最後に、私は2020年３月にてマンガ研究センター長を辞することになっており、これまでの親しみある勤務に心から感謝の意を表する。今後も研究員・スタッフともに、「マンガのために貢献」することを誓いとして、前進して欲しいと願うばかりである。